

## 母語の流暢さをベースラインとした第二言語の流暢さの測定方法 ～異言語間の発話速度をどう比較するか～

シュロスブリー美樹

第二言語習得研究において流暢さ測定方法 (Lennon 1990; Kormos 2006) が開発されてから、多くの研究者がスピーキング能力の指標の一つとして流暢さを測定している。ところが母語の流暢さと第二言語の流暢さには関係があるという報告があり (Towell et al. 1996; Riazantseva 2001; Derwing et al. 2009; de Jong et al. 2015; Shrosbree 2017)、このことから学習者の第二言語の流暢さの測定は、本人の母語の流暢さをベースラインにするべきだという声があがっている (de Jong et al. 2009; Segalowitz 2010)。

発話速度は最もよく使用される流暢さ測定項目の一つであるが、研究によっては母語における発話速度を直接ベースラインとして第二言語と比較しているものもある。しかしながら、発話速度の計算には音節数が含まれるので、例えば日本語と英語のように音節構造が大きく違う言語どうしでは、異言語間の発話速度直接比較は避けるべきである。そこで本研究は「母語の流暢さをベースラインとした第二言語の流暢さ測定方法」研究の一環として、日本語と英語の発話速度比較方法を探った。自然発話を調べる前に、今回は音読発話における日英発話速度を比較した。

本研究はまず日本語母語話者 14 人と英語母語話者 14 人の音読における発話速度を比べた。次に日英バイリンガル話者 14 人の音読における発話速度を日英それぞれで調べた。母語話者とバイリンガル話者の結果を比べたところ、本実験に参加したバイリンガル話者の発話速度は日本語においても英語においても、母語話者のものと違いがない事がわかった。次にバイリンガル話者の英語における発話速度と日本語における発話速度の相関を調べたところ、強い正の相関がある事がわかった。最後に 140 個のトークン (14 人×5 回繰り返し×2 言語) の回帰直線式を求めた。

本研究は、バイリンガル話者の両言語のデータを用いて、異言語間の発話速度比較が可能だと提案している。学習者の流暢さ診断のために、母語の流暢さをベースラインとした第二言語の流暢さ測定方法の開発を進めていくべきである。